

全国の舞台で、快走



(写真：毎日新聞社)

保芦 摩比呂 (学校法人石川高等学校3年)

12月21日(日)から行われた全国高校駅伝大会で学校法人石川高等学校(福島)が見事日本一に輝きました。その、学法石川の選手として、町内出身の保芦摩比呂選手が6区での快走を見せ、日本一に貢献しました。

小・中学校時代からすでに注目選手に

保芦選手は、小さいころから走ることが好きな選手で、県内のみならず、県外のレースにも自ら出るほどだったそうです。

その実力は確かなもので、令和元年に開催された東日本都道府県小学校陸上競技交流大会の1500mで3位入賞。さらに令和4年の全日本中学校陸上競技選手権大会の1500mでは、4分3秒39で4位に入賞するなど輝かしい成績を納めています。

さらなる高みを目指し、県外の強豪校へ

高校進学では、県内に残ることも考えたそうですが、全国トップレベルの力を持つ選手たちと切磋琢磨する道を選び、親元を離れて寮生活をしながら、陸上生活に打ち込んでいくそうです。

ケガと向き合った苦難の時期

輝かしい活躍の裏で、高校生活はケガに悩まされた時期もありました。1年生の頃は、走行距離の増加や環境の変化から体調を崩すこともあり、2年生の頃も度重なるケガに苦しんだといいます。

そして迎えた高校最後の年。右足首の疲労骨折により、夏の全国高校総体への出場が叶いませんでした。そんな悔しさを胸に抱いて臨んだのが、今大会でした。

チームの仲間とともに全国の舞台へ

ケガの影響は、復帰にあまり影響がなかったと話しますが、様々な想いを抱え、レースに臨んだそうです。レースでは、松田監督が「追いつかれても6区で勝負できるように」と送り出された保芦選手は区間2位の快走を見せるなど、素晴らしい走りを見せてくれました。

今大会に向けて、特に重視したのは、「ピークの調整」だそうです。かつて合宿で頑張りすぎてしまい、本番で思うような力を発揮できなかった経験がありました。今回は、気持ちを抑えながらも調子を上げていったそうです。

また、日ごろのジョギングなどのメニューが個人の裁量に委ねられていたことも、自分で工夫しながら調整する自身のスタイルに合っていたと語っています。

自身の性格とチームの絆

大会を終えて改めて自身の性格を振り返り、「負けず嫌いであること」や「自分のペースで走るレース展開が合っていること」を再確認したといえます。それと同時に、駅伝という競技を通じて「チームの仲間を信じて走ることの強さ」を改めて実感したそうです。

家族とチームに支えられた成長

ご両親は、保芦選手の小さい頃から、本人の意思を尊重し、県外のレース巡りを行い、スポーツ少年団に所属していた際には、指導者資格の取得を行うなど献身的にサポートしてくれていました。保芦選手は、「高



次の目標は「大学3大駅伝」

次の目標について尋ねると、大学に進学し、1年生から3大駅伝を走りたいと胸の内を話してくださいました。

一歩一歩、挑み続ける保芦選手の進化から今後も目が離せません。この度は、大変おめでとうございます。